



銀谷の

かなや

たなばた

キラキラ光る星空と白銀

日本遺産に認定された銀山のまちに
いまでも残る「七夕さん」の風景を
のんびり歩いて、楽しんでください。

各施設で
紙衣キット

100組限定(200円)

※各施設ではコーヒーなどカフェとしても
ご利用いただけます。

2022

7月9日・10日

[時間]

9時～17時

—— 生野ひいきの会支援事業 ——

[会場]

生野町口銀谷界限

くちなや

生野の七夕飾りは、縁側の軒下に二本の笹飾りを立て、その間に細い竹竿や麻のオガラを渡すと、そこに千代紙で作られた幾枚もの衣(＝着物)を掛け並べるものです。華やかな振袖、簡素な平袖、かわいい筒袖……まるで小さな着物を虫干ししているかのよう。けれど、色々な形の紙衣は、神社のヒトガタにも似て、みな三角にとがった頭を持っているのです。これを生野では「七夕さん」と呼び、数が多い時には渡す竹竿を三段、三段と増やして飾ります。その下に文机を出して、茄子や胡瓜、南瓜などの野菜を据え、天の二星にお供えます。このように紙衣が七夕飾りの中心に置かれる構図は全国的にもめずらしく、生野以外では、大塩や的形、白浜、曽根など播磨灘沿岸地域で見ることができません。

初節句を迎える子どもたちのために「七夕さん」(＝紙衣)を祝うと、その子が着るものに不自由しない、女兒なら裁縫が上達するとして盛んに飾られたのは、生野においては、昭和三十年代までのことだったでしょうか。実際、平成十五年の七夕に生野を訪ねたときには、伝承の七夕飾りを行う家は二軒も見つけられませんでした。それが、七夕文化研究会のメンバーとともに訪問した平成十六年には地区ごとに高齢の方々が集まって楽しめる七夕会があり、その場には昔ながらの「七夕さん」が登場することを知りました。帰り際、生野の紙衣は素晴らしいものだから、皆さんの力でぜひ復活を、とお願いしたことでしたが、以降、町並保存や町の活性化を推進する施設、また、郷土愛にあふれる方々のお力によつて、年を追うごと、町に七夕の飾りの数が増えていったのです。

◎「銀山の町の七夕／尾崎織女(おさき あやめ)」より抜粋



◎お問い合わせ

生野まちづくり工房「井筒屋」 兵庫県朝来市生野町口銀谷640 tel 079-679-4448

朝来市旧生野鉱山職員宿舍「甲杜宅」 | 口銀谷銀山町ミュージアムセンター「旧浅田邸」